新型コロナ　影響で耐性菌対策が後退　米 CDC

07/28 毎日新聞 医療プレミア編集部

抗菌薬の適正使用を訴えるポスター＝国立成育医療研究センター病院で、２０１７年１２月、河内敏康撮影

新型コロナウイルス感染症の流行は、それまで前進していた米国の薬剤耐性菌対策を後退させた。米疾病対策センター（CDC）は、薬剤耐性菌問題に対する新型コロナの影響について報告書をまとめ、その中でこう結論づけた。

薬剤耐性とは、通常の治療に使われる抗菌薬や抗ウイルス薬、抗真菌薬などに対して、細菌やウイルス、真菌、寄生虫が耐性を獲得し、これらに感染した場合の治療が難しくなる現象のことだ。

CDC は、2020 年に新型コロナウイルスの感染拡大がいったんピークに達した後の、薬剤耐性菌の状況を分析した。その結果、7 種類の薬剤耐性菌について、院内感染した患者（死者も含む）の数が有意に（統計的に偶然とはいえないほど）増え、19 年から 20 年までに全体で 15％増加していた。種類別の増加率は「カルバペネム耐性アシネトバクター」が 78％、「多剤耐性緑膿菌」が 32％、「バンコマイシン耐性腸球菌」（VRE）が 14％、「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌」（MRSA）が 13%だった。

また 20 年には、抗真菌薬に耐性を示す真菌（抗真菌薬耐性菌）による院内感染も増えた。たとえば、カンジダ・アウリス（Candida auris）は 60％増え、それ以外のカンジダ属の真菌も 26％増えていた。なお、12 年から 17 年にかけては、薬剤耐性菌による院内感染は 27％減っていたという。

CDC は「抗菌薬の使用が増えたことや、感染の予防と管理に関するガイドラインの遵守が難しくなったことが、薬剤耐性菌感染の増加をもたらしたのではないか」との見方を示している。また「新型コロナの流行が原因で、こうした医療関連の薬剤耐性菌への感染が

増えた可能性が高い」とも指摘している。

「一時的な後退にとどめなくては」

CDCの抗菌薬耐性調整・戦略ユニット長のMichael Craig氏は、「この後退は一時的なものであり得るし、また、一時的なものにとどめなくてはならない。われわれが対策を怠れば、薬剤耐性菌の拡大は止まらないことを、新型コロナの流行ははっきりと示した。われわれには無駄にできる時間はない」と強調している。そして、「薬剤耐性菌の感染拡大を阻止する最善の方法は、米国民の安全を守るために必要な予防策が不十分な部分を特定し、そこに投資することだ」と主張している。

今回のCDCの報告を受け、米国感染症学会（IDSA）会長のDaniel McQuillen氏は、緊急に対策を講じる必要があると主張する。同氏はIDSAが発表した声明で「これは、もはや将来の危機ではない。目の前にある危機であり、すぐに対応する必要がある。入院率が高い状況下では常に、対策を講じない限り薬剤耐性菌に関わる感染率と死亡率は上昇する可能性が高い」と指摘している。また、米連邦議会に対し、超党派の法案「PASTEUR Act」を可決するよう求めている。この法案は、新たな抗菌薬の開発や、抗菌薬の適正使用に向けた取り組みに対し、資金を提供する内容だ。

CDCの報告書によると、新型コロナの流行が始まった年の1年間に、2万9400人以上の人が医療関連の薬剤耐性菌の感染が原因で死亡し、その約4割は院内感染だった。さらに、流行の影響でデータが入手しにくくなっていたため、実際の薬剤耐性菌感染による死亡例はさらに多い可能性があるという。

CDCはさらに、新型コロナ流行の初期に医師たちが、発熱や息切れで苦しむ患者を治療しようと、抗菌薬（一般に、ウイルスには効かない）を使ったことを指摘。この使用は、「抗菌薬使用の適正化」という歴史的流れに対する、逆行だったと説明している。20年3月〜10月に入院した新型コロナ患者の約80％に抗菌薬が使われたという。

なお、多くの医療機関は、薬剤耐性菌を減らす計画を作っていたが、その多くは新型コロナ患者の治療による負担を理由に停止された。特に介護施設ではその傾向が顕著だったという。